
新約 とある魔術を希望の温度変化

深冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新約 とある魔術を希望の温度変化

【Nコード】

N5012R

【作者名】

深冬

【あらすじ】

あの一件以来、深く深く沈み始めた少年はその暗闇で何を成すのだろうか？

相変わらず対人戦最高の殺傷能力を誇る彼は、その暗闇の中でもがき苦しむ。いったい何が悪かったんだろうかと。

それでも時は戻る事は許さないとでも言うように止まることなく進んでゆく。

まあ色々あるが、ノリと勢いだけのそんなお話。

そんな俺の日常なんてカッコ良く言ってみたりする（前書き）

*注意

この作品は続編であり、前作が存在します。

前作を読まなければ理解できない部分が出てくる可能性があります。
ご都合主義満載です。

不定期投稿です。

以上の事を踏まえた上で、お読みください。

そんな俺の日常なんてカッコ良く言ってみたりする

第一話【●月▲日】

あの日以来、俺の日常は目まぐるしく変わっていった。

それまでの日常に、血なまぐさい非日常が新たな日常として加わり、俺は表と裏の日常を手に入れた。

別に望んでいたわけではない、何か知らないが自分でもよくわからないうちに巻き込まれていたと言う方がしっくりくる。

「はあ……」

自然と出てくる溜め息。というか、最近溜め息の数が多くなってきているような気がしていた。

「ほら、サボってないで超頑張って制圧してきて下さいよ」

背後から掛けられた言葉は俺を裏の日常の住人だった。絹旗最愛。髪型はボブ背の低い中学生の少女だ。

今俺は、絹旗と二人でとあるビルのビルの間の路地にいた。

「わかってるよ。ちょっと待ってけ」

絹旗にそう返事をして、目の前の高校生と思われる五人ほどの集団に向き直る。

こいつらが今回の標的だ。何をしたか知らないけど、学園都市の上層部に目をつけられるとか災難だったなと言えない。

——ドコッ

「いてッ」

高校生の集団を見て可哀想だなとか思っていると、背後から絹旗にヤクザキックで蹴られた。

「何すんだよ!?!」

「超早くしてください、高峰。このあと私は観たい映画があるので」

「あー、もうわかったよ。さっさと片付ければ良いんだろ」

「わかればよろしい」

年下の少女に命令される。それはそれで良いと思ってしまう自分がいるのが少々情けないところか。それにしても俺の待遇は改善されないかね。

高校生の集団は俺たちの様子を見ていたようで、「女に命令されるとか、情けないな」とか「チビにはお似合いじゃね?」とか俺たちを侮ってるご様子。

てか、今チビって言ったヤツ誰だ?

「雑魚の相手はメンドクサイな」

口の中で呟いてから、俺は脚に力を入れ駆ける。集団に接近し、俺の能力を使う。

——テンパチャーチェンジ
温度変化。

能力の効果範囲 24・9 m。限界温度、上限 1235 で下限 -42。同時に温度変化させられる物体数 3。

ただの何て事の無い温度を制御するだけの能力。だが、それは体温を持っている生物に対し、絶対的な威力を誇る能力でもある。

加減一つで人間の血液を沸騰させ水蒸気爆発を起こさせ血の雨を降らせたり、逆に体温を下げ永遠の眠りに着かせる事も簡単にできてしまう能力だ。

突如として接近してきた俺に対し、数拍遅れて高校生の集団は反撃しようとする。能力を使おうとしたのか拳銃でも取り出そうとしたのかはわからない。

何故なら、俺がそんな事をさせないからだ。

バタバタと高校生の集団は次々と倒れる。

「相変わらず、呆気なかったですね。高峰の能力は超反則級ですよ」「そんなこと言われてもなあ……。早く終わらせろって言ったのは絹旗だったろつがよ」

別に高校生たちを殺したわけではない。体温を急激に下げ、昏倒

させただけだ。今回の依頼は生け捕りって話だったからな。

「さて、超報告です」

俺の言葉を見殺しして絹旗は携帯を取り出し、どこかへ電話をかける。

まあ無視されるのは慣れっこだから別に良いけどさ。なにせ俺が所属する『アイテム』では一番最近入った新参者だしな。

それからあれよあれよといった具合に、『アイテム』の下部組織がやって来て高校生たちを回収していった。

そして、俺と絹旗は『アイテム』行きつけのファミレスに場所を移す。

「遅かったじゃない」

迎えたのは『アイテム』のリーダーである麦野沈利。スラリとした長身で、ふわふわした茶色の髪が特徴のおそらく高校生と思われる女だ。何故年齢を知らないかと言うと聞いた事が無いからだ。

女性に年齢を聞くのは失礼にあたるし、それにメンバーに年齢なんて聞いた日には俺の身体に風穴があくか、俺の身体が人間サンドバックに早変わりするかのも二択だろうから自重している。だから他のメンバーの年齢も知らない。

麦野の反対側にはいつでもどこでもピンクジャージを着ている滝壺理后がいた。基本無言なヤツだ。一度なんでピンクジャージを着ているか聞いたところによると彼女は衣類とは着心地優先との事。

そこで、滝壺の隣にいる帽子を被った金髪の元気はつらつ少女はフренда「セイヴェルン。名前の通り外国人。」

「それでは、超用事があるのでこの辺で失礼させていただきます」

脳内でメンバー紹介していると、絹旗がそんな事を言っつてファミレスから姿を消した。まあさっきも観たい映画があるとか何とか言っつたしな。

絹旗がいなくなるのを視線で追っつてから俺は麦野の隣に座る。

「お疲れさま。アナタも何か頼みなさい」

「ああ、そうだな」

俺はテキトーにコーヒーでも頼んでおく事にする。

それからホント駄弁つてた。

本当に俺たちは学園都市の暗部組織である『アイテム』なのか？と疑問に思っつてしまっくらしいに。

基本的に元気印のフрендаが話を振っつて、俺と麦野がそれに乗る。絹旗は終始ボーッとしていた。傍から見たら男1人女3人という俺だつたら男をブチ殺したくなる状況である。

そんな俺の裏の日常。

「アキラせんぱーいつ！」

『アイテム』のメンバーと別れ、ファミレスを後にした俺を呼ぶのは佐天ちゃんだった。佐天涙子。フレンドと同じく元気印の長い黒髪に花のヘアピンをつけた女の子だ。制服を着ている事を考えれば学校帰りなのだろう。

ちなみであるが、俺は『アイテム』で呼び出される日は学校をサボっている。

「こんにちは、高峰さん」

佐天ちゃんの隣には同じ制服を着た初春ちゃんまでいた。初春ちゃんの頭には相変わらず野暮ったい花飾りが存在している。

「や、二人とも」

こんにちはーと世間話をしながら、何故かわからないがそのままシヨッピングとあいなあった。

あれ……？なにがどうなった？

「コレ似合いますかねー？」

場所はセブンスミスト。この場所は幻想御手事件の時に被害にあっ
たようだが、今ではそれが無かったように営業している。
レベルアップ

「似合うんじゃないかな」

「じゃあ、コレはどうですか？」

「似合うと思うぞ」

次から次へと俺の元に服を持って来て似合うかと聞いてくる二人に毎回似合うと返答する。

無責任すぎやしないかと思うかもしれないが、二人とも美少女な訳であるので余程冒険した服を持ってこない限り大抵の服は似合っていたので問題ない。

そしてそのままその服たちは会計へと持っていかれる。というか俺が持つていく。

男なら黙って荷物持ち……って誰かが言ってた気がする。

セブンスミストを出た俺たちは購入した服をコインロッカーに預けて下校時刻までゲームセンターで遊び倒した。

「今日はありがとうございました」

「服まで買っただいてありがとうございます、アキラ先輩」

「気にしないで良いよ。最近は色々と儲かってるからさ」

そう、『アイテム』で活動するようになってから金は有り余るぐらいに俺の手に舞い込んできた。裏の仕事と言うのは最高に儲かるもんだな。なので、少しぐらい街に還元しなければという感じた。

そんな俺の表の日常。

二人を学生寮まで送ってから俺も帰る事にする。

「お待ちしていました」

帰宅した俺を待っていたのは、ミコだった。ミコは妹達^{シスターズ}なんだがミサカネットワークから切り離された個体で、色々あって今は俺と同じく『アイテム』所属している。所属しているって言っても俺の補佐と言う立場だな。

「なんで俺の部屋の中にいるんだ……？」

おかしい。確かに俺は出かける前に鍵をかけた。心配性の俺は二、三度ドアをガチャガチャさせてしまっているか確認したから絶対に鍵は駆けていたはずだ。

「フフ……ミコにかかればこの程度の施錠くらい楽勝です、とミコは華麗なピッキング技術を自慢します」

そんなミコの言葉を聞き、俺は溜め息を一つ。ミコが独自の成長をしてくれるのは嬉しいが、方向性を間違えている気がする。

「まあいいか。で、なんで俺の部屋にいるの？」

俺の問いかけにミコは自分の左脚を擦りながら、

「義足のメンテナンスが終了したので報告をと思いまして」

見ただけではわからないがミコの左脚は義足だ。左脚は一方通行に引き千切られ、今は義足を装着する事によって日常生活を送っている。というか、見ただけじゃ人間の脚を区別できない義足を作るとはさすが学園都市の技術だ。

コレは補足情報なんだが、ミコの義足は鋼錬でいうオートメイルみたいにギミック満載である。まあ神経までは繋がっていないが、ミコはそれを自分の電撃使い（エレクトロマスター）の能力で自在に義足を操っている。

「そうかそうか、それはお疲れさん。ところで飯は食ってくか？」

「はい、頂きます」

俺は返事を待ってから夕飯を作り出す。といっても、カップラーメンなんだがな。実は料理は一切出来ない。実はと言うレベルの話でもない気がするのには気のせいだ。

手早くビニールの包装を剥がし調味料を入れてから水を注ぎ、俺の能力で水を沸騰させる。後は三分待つだけ。本当にカップラーメンは簡単に出来て最高の食べ物だと思うのは俺だけか？

フタを閉めたカップラーメンを持ってテーブルへと行くと、ミコが思い出したように、

「ああ、高峰さん。忘れてました」

「ん？どうした？」

俺はお湯を零さないように慎重にカップラーメンをテーブルに置く。

「どうぞ、とミコは久しぶりに食べるジャンクフードに目を奪われながら高峰さんに例の物を渡します。」

俺はカップラーメンに目を奪われながらも俺に何かを渡してくるミコに思わず苦笑してしまう。

ミコは御坂ちゃんから作り出された体細胞クローンで、しかもそこからさらに様々な薬剤を投与することで急速に成長させられた。だから、ただでさえ寿命の短い体細胞クローンがさらに短命になっていた。

なので、ミコは寿命を少しでも延ばすために研究施設で調整を行っていた。きっとその時からジャンクフードを禁止でもされてたんだろうな。で、今になってようやくそれが解禁されたと。

結構適当な推理だが、当たらずとも遠からずかな？まあどうでも良いか。

俺は嬉しそうに麺を啜るミコを横目に見つつ渡されたモノに視線を移す。

「そつえば、こんなモノも頼んでたっけな」

そこにはミコとお揃いのデザインのゴーグルだった。サーモグラ

フィカメラ機能ゴーグル。ミコが電磁波を見るために使っている軍用ゴーグルを見て自分の戦力増強のために頼んだっとな。

なぜ『アイテム』経由で手に入れなかったかと言うと、俺自身が学園都市上層部を信用してなかったからだ。ミコ経由でカエルの医者に頼んだんだが、何故にミコの軍用ゴーグルと同じデザインなのだろう？

「なあ、なんでミコの使ってるゴーグルと同じデザインなんだ？取り違いそうで心配なんだが」

「特に意味はありません、と高峰さんとお揃いだグフフと内心喜びます」

おいおい、内心バレてますよー。

「ハハツ、そうか」

これには乾いた笑い声しか出なかった。

試しに装着してみる。すると、視界は温度だけ世界になった。温度の低いところから黒、青、緑、黄、赤、白と段々に色別で高くなつて行くみたいだ。

しかもこのゴーグルは暗視機能も備わっているみたいで、なかなか便利そうだ。

バッテリーも常時使用していても一週間持つみたいだし一日や二日充電を忘れても屁でもなさそうだ。

これで俺は常時ゴーグルを身につけてるゴーグル族になったぜ。
キラ。

すいません、ふざけました。

とにかくコレで俺は更なる力を手にしたと言う事になる。

これで俺が魔術サイドへと介入する時はだいぶ楽になるな。

え？今は何月何日だって？

今は九月十日だ。

みんな、聞いてくれよ！九月十日なんだよ！？

俺の記憶によると、確実にあの八月二十二日から今日までに魔術
サイドの話があつたはずなんだよ！？

はい、完全に介入出来ませんでした。自分が悲しい。

あの原作四巻の入れ替わりは全く気付く事が無かつたし、原作五
巻の八月三十一日の出来事は日付を憶えていたくせに『アイテム』
の召集が掛かり介入ができなくて涙を飲んだのを憶えている。

そして原作六巻は八月三十一日のショックが大きすぎて部屋に引
き籠もっていたら終わってしまった。原作七巻は記憶が曖昧で
何があつたっけ？って感じた。

だから今は原作七巻～原作九巻辺りだと自分の中で踏んでいる。

というか、原作の時間が全然進まなさ過ぎて、今がどの辺りか全く見当がつかん。

「高峰さん、早く食べなければ麺が伸びてしまいます。よければミコが食べてあげましょうか？」

おっと、考え事をし過ぎていたようだ。ミコが獲物を狙うように俺のカップラーメンを見ている。

「おいおい、そんなに食い過ぎると太るぞ」

少し脅してみると渋々と言った具合に諦めてくれたようだ。

それにしてもミコがインデックス化してきているような気がする。胃袋的な意味で。

こりやなかなか緊急事態だな。

俺は少々伸びてしまった麺を啜りながらそんな事を心配した。

そんな俺の日常。

．．．to be continued？

影分身って使うことが出来たらどれだけ良いことが

第二話【九月十一日】

「なかなか面白いなあ」

俺は今、ゴーグルを装着して街中を歩いていた。視界に映るのは温度だけの世界。もともと、A I M 拡散力場のせいで温度には敏感な俺だったが、それが目で感じられるのはなかなか新鮮だった。

まあ傍から見たら、街中で軍用ゴーグルと装着している変人ではないのだが。その部分については気にしないようにしている。

俺が未知の体験を楽しんでいると、制服の裾が引かれた。

「高峰さん。ミコはアレが食べたいです」

「ん？どれだ？」

制服の裾を引いたのはミコで、今俺たちは昼飯を食べに街へと繰り出している。ゴーグルをズリ下げ、首に提げてからミコの指差す方を確認する。

「またあのファミレスかよっ！？」

ツツコンでしまったのは許して欲しい。ミコが指差していたのはファミレスの前に立てられている旗……と言って良いのか？つまり今この商品が売り出し中ですよっていう広告みたいなヤツだ。

それだけなら俺だってツッコまないさ。だがな、そのファミレスは『アイテム』御用達のファミレスであり、御坂ちゃんグループでよく行くファミレスでもあるんだよ。それに前にインデックスを連れてきたファミレスでもある。

いい加減、ツッコミなくなっただよ。その辺は理解して欲しい。

このまま突っ立っていても仕方ないので、ファミレスに入る。何度か見たことのある店員に案内され各自メニューを注文する。

ミコが頼んだのは何やら可愛い飾り付けのしてお子様ランチ。御坂ちゃんなら絶対に自尊心が邪魔して頼めないメニューだ。だが、ミコならば自尊心なんてからっきしに無いので頼んでしまっている。

つか、同席している俺が恥ずかしいんですけど……。

互いに食べ終わり、追加で飲み物を頼んで駄弁りモードに移行。

「昨日聞きそびれたけど、身体はもう大丈夫なんだよな？」

「はい、問題はありません。しかし、問題をあげるとしたらお姉さまから頂いた缶バッチを紛失してしまった精神的ショックでしょうか、とミコは失ってしまったモノを想います」

そう言えばそうだったな、と俺は思い出す。あの缶バッチはいつの間にかミコの手から消えていた。

そのことでミコは自分の中で苦しんでいるのが傍から見てもわかった。

だが、こんな言い方はどうかと思うが、それは結局過去のことでは無い。

過去とは現在から照射された記憶でしかないし、一番大事なのは今ののだ。今が良ければ過去の事など思い出す事も無いから。

「そう気にすんなって。それはもう御坂に謝ってたはずだろ」

記憶に新しいその場面。つい先日、ミコは何故か俺を伴わせて御坂ちゃんにそのことを謝りに行った。その時、御坂ちゃんも気にしないと言っていたし、ミコが気にする事では無かった。

うーん、一気にしんみりしちゃったな。

この空気を打破するために俺はミコを連れ近くのゲームセンターに行くことにした。

ミコは始めていくゲームセンターに驚きを示しつつ、いつもの無表情を貫き通した。どんな顔かと聞かれれば、それはミコを知っている人でなければ気づけない程度の表情だったと言う感じだ。つまりキョンが長門の……以下略。

そのゲームセンターの中でミコが一番反応したのは貯金箱で有名なUFOキャッチャーだった。まあある意味予想通りでしたけどね。

ミコはUFOキャッチャーのガラスに柔らかそうなぽつぺたをコレでもかとくつつけ中のモノに視線を向ける。

「アレが欲しいです高峰さん」

「りょーかい」

こんな時、男は黙って頑張ると言うのが俺の中ではセオリーだ。

コインを投入し、ボタン二つでアームを操作する。1のボタンで横に移動し、2のボタンで奥行きを決める。

ぐわっ、とアームが開き狙った獲物を掴みにかかる……………失敗。

え？そこは成功するパターンじゃね？って思った人は負けだ。何に負けたかは知らんが。

しょうがないじゃないか、別に俺UFOキャッチャーが得意ってわけじゃないし。

そんなわけで、諦めずに次のコインを投入だ。

後ろでミコが心配そうな顔をしているがそれは気にしない事にしよう。うん。

失敗。失敗……失敗。

もう一万円ぐらい使った気がする。途中で両替機に急いで走って行ったのは良い思い出である。もはや以前の御坂ちゃんのガシャポン大人買い事件の時レベルである。

というか、自分のUFOキャッチャーの才能が無い事に嘆きたい。

「アンタたち、こんなところで何してんのよ?」

そんな折、救世主が現れた。そう、御坂ちゃんである。今日その茶髪が眩しいぜ。嘘です。そんなに眩しくくないです。

「こんにちは、お姉さま」

ミコはぺこりと頭を下げ挨拶をする。

そんなミコとは打って変わって俺は、

「いや、ちよつとUFOキャッチャーの景品を狙つてましてね。そこで御坂様にはわたくしめの代わりに取っていただきたいのですが?」

もはや俺の自尊心^{プライド}なんて無いんだよ!?!とにかくあの景品さえゲット出来れば良いんだっ!

「はあ、しょうがないわね。UFOキャッチャーの名人である、この美琴大先生に任せときなさい」

俺の誠意が伝わったようで、御坂ちゃんは持っていたカバンをミコに預け、俺と場所を変わった。

「ああ、アンタのそのキャラキモかったから止めなさいよ」

……はい、ごめんなさい。おっしゃる通りです。女子中学生にキ

モいって言われる辛さを始めて知った今日この頃である。

「で、何が欲しいわけ？」

「アレです、お姉さま」

御坂ちゃんの問いかけにすぐさま答えるミコ。それほどまでにアレが欲しかったのか……。

「コ、コレは——っ!？」

UFOキャッチャーの中の景品を目にした御坂ちゃんの顔に驚きの表情が上書きされる。個人的にアレが何で良いのかよく分らないよ。

「ゲ、ゲコ太の人形じゃない!? それも生産中止で私でさえ諦めた幻のエンジェルバージョン!!」

ほう、それは初耳だ。いやまあ、ゲコ太に何の興味も無い俺が知るはずも無いんだがね。

ガラスケースの中にはゲコ太がいくつか並んでいる。

景品を見た御坂ちゃんは俄然やる気になったようで、ものスゴイ形相でコインを投入し、三十秒も満たないうちにゲコ太を入手しやがった。エンジェルバージョンおっと、入手してくれた。

御坂ちゃんは、はいっ、とゲコ太をミコに渡す。受け取ったミコはどこか嬉しそうだ。

ああ、なるほど。このゲコ太は御坂ちゃんから貰ったモノだからか。ミコの中ではあの缶バッチと変わる大切なモノになったろうな。

良かったな、ミコ。

俺がそんなことを思っていると、御坂ちゃんは続けてもう一度コインを投入し、もうひとつゲコ太をゲットしていた。本人は「黒子にあげるのよ」と顔を真っ赤にして言うてはいるが、誰がどう見ても自分用ですねわかります。

「それにしても、さっきから気になってたんだけど、何でアンタまでゴーグル持ってるのよ？」

「ああ、これか？」

俺は自分の首から提げている無骨なゴーグルを手で持ち上げる。

「これはサーモグラフィカメラ付きのゴーグルだな。ちょっと想うところがあつて持ち歩いてるんだよ」

「……ふーん」

正直に答えたのに御坂ちゃんはいぶかしむような視線を送っている。

え？俺ちゃんと答えたよね……？嘘なんて言うてないし、そんな視線向けられるはずないんですけど。

「ま、いつか」

何が良いのか知らんけど、納得してもらえて幸いだ。

「そうそう、この際言っておきたいことがあるんだけどさ。いつまでその子に常盤台の制服着せてんのよ」

「一回、ちょっと待とうか……」

えっと、今御坂ちゃんはミコの着ている服装について言っただよな。

ミコを見る。いきなり視線を向けられたミコは「ん？」と首を傾げる。可愛い……じゃなくて！確かにミコはと常盤台の制服を着ていた。いやまあ、そんなことは初めから知ってるんだけどさ。

「言っておくが、別に俺が好んで着せてるわけじゃないぞ」

ミコに「だよな？」と確認する。

「はい、ミコはコレしか衣服を持っていませんので、とミコは言外に貧乏だと宣言します」

いやいや、貧乏と言うか、ミコはカエル顔の医者 of 病院に住んでいる。なので基本的に服を買う機会が無かったわけだ。

「それなら、アンタが何か買つときなさいよ」

「わかったよ」

俺としてはミコがどんな服装をしていても良いのだが、御坂ちゃんにとっては常盤台の制服はNGらしい。

個人的な推測だとドッペルゲンガー騒ぎとかになるのを避けたいとかかな？まあ、俺にとってはどうでも良いことだけど。

ミコの服装の件が^{くた}り終わり、そのまま俺たちはゲームセンターから出ることになった。

男の俺一人と、傍から見ると限りは常盤台中学の双子のお嬢様。なんつーか、ゲームセンターに居づらかったってのが本音だ。

嬉しそうにゲコ太を胸に抱く二人の少女を引き連れゲームセンターの敷地から出る。

そこには、

「お姉様ではありませんか！？こんなところで出会えるなんてこれはもうわたくしたちは赤い糸で繋がれていること間違い無しですのっ！」

いや、うん。白井ちゃんがいたよ。右腕に腕章をつけていることから、今は^{ジャッジメント}風紀委員のパトロールというヤツなのかもしれない。

「よ、白井さん」

「高峰さんもおられましたか」

おいおい、御坂ちゃん以外眼中になしでしたか。いつもは追いかけられる立場だったのでこれはこれで寂しいものがあるな。

俺を確認した白井ちゃんは顔をそのまま右へとスライドさせる。

「お、お姉様が二人!?」

そんな白井ちゃんの反応に対し、御坂ちゃんは「あちゃー」と額に手を当てた。

「双子……? いえいえ、以前お姉様の戸籍を調べた限りでは、たしかに双子なんて存在していませんでしたわ。考えられるのは――」

白井ちゃんは頭を抱えながら自分を納得させるためにぶつぶつと可能性をあげてゆく。誰かが肉体変化系メタモルフォーゼの能力で御坂ちゃんの姿をマネているとか、実は御坂ちゃんのクローンではないかとか。

それ、ビンゴ! ビンゴだよ、白井ちゃんっ!

そんな白井ちゃんを置いておいて俺の背後では、

「ややこしくなるから、アンタはどっか行きなさいよ」

「事情が上手く理解できませんが、お姉さまが望むならばミコはこの場から離れることにします」

御坂ちゃんは、情報処理能力が空回りして頭から煙を昇らせている白井ちゃんを良いことに、最初からミコはこの場にいなかったということにしたいらしい。

まあ俺としても面倒事は嫌だから別に良いんだけどさ。というか、御坂ちゃんから放たれた視線が恐くて従うしかないと言っのが一番の理由だが。

「高峰さん、ミコはコレで失礼することにします」

それではまた、とミコは俺に一礼して去っていった。

「おーい、白井さん」

依然として頭から白い煙を出している白井ちゃんに呼び掛けるが、俺の問いかけには答えてくれないようだ。

「出番だぞ、御坂」

「うつ……このまま放置してわけにはいかないかな？」

「いやいや、普通に考えてその選択肢は無いだろ。道端で風紀委員が頭抱えてるなんて知れ渡ったらガラの悪いヤツらが絡んでくると間違いなしだぞ」

「はあ……、面倒なことにならなきゃいいけど」

そう言いながらも、御坂ちゃんは白井ちゃんに呼び掛けることで意識を覚醒させた。

「ハッ、お姉様が一人……!？」

「そんな驚いた顔して、どうしたのよ黒子」

「え？たしかにさきほどまでお姉様が二人いましたのに……」

「バカね、私はいつでもどこでも一人だけに決まってるじゃない」

「そうだぞ、白井さん。御坂が二人いるわけないじゃないか」

御坂ちゃんに追隨するようにゴリ押し気味に事実を改変する作業を開始する。

「いえ、でも、たしかに二人のお姉様が二人いたように……」

「ほら、よく見てみろよ。ここにいる御坂は一人だけだろ？」

俺は御坂ちゃんの両肩を掴み白井ちゃんの前に出す。顔は笑顔の御坂ちゃんから右ひじを腹に貰ったのは我慢しなければな。

「そうよ、私が二人もいたら変じゃない」

無理矢理感漂う微妙な笑顔を御坂ちゃんは自分の顔に貼り付ける。おいおい、そんな顔してたらバレちまうぞ。

先ほどのお返しとばかりに御坂ちゃんの両肩を掴んでいる両手に力を込める。そしてまたもや右ひじを腹に貰う。

そんな意味の無い死闘を繰り広げていると白井ちゃんは渋々ながら納得してくれたらしい。

「そ、そうですの。お姉様が二人いるなんてパラダイスのような世界は存在しませんの！ええ、きっとそうですわ！」

みなさん、どうやらこの世界はパラダイスらしいですよ。御坂ちゃんやんが二人……厳密には御坂ちゃんと遺伝子上同一の存在が一万人在在するこの世界は白井ちゃんにとってたしかにパラダイスで間違いないな。うん。

·
·
·
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
?

最高の1日なんてそう何度も簡単に訪れるものではないぞ

第三話【九月十二日】

残暑も厳しい今日この頃、……………嘘です。俺の能力を使えば自分の周りの空気のを温度を最適な温度に保つことが出来るので、さして暑くなんてない。

何で俺が冒頭からこんな事を言っているかと言うと、街中を歩いていて「みんな暑そうだなあゝ」なんて思ったからだ。はい、完全に厭味ですよ知ってます。

そんなムシムシした暑さが残る中、俺は紙袋を抱えながらとある場所を目指していた。

とある場所については、この後すぐわかることになるだろうが、今はそんなことどうでも良いのだ。

「固法さんっ!」

何て言うか、もう、ねえゝ。この俺が唯一敬愛する女神である固法美偉さんとはったり街中で出会うことが出来たんですもん。当初の予定なんてどうでも良くなってきてしまったと言うものだ。

「あら、高峰君じゃない。そんな荷物を抱えてどこ行くの?」

「あつ、いえ、病院までちょっと」

俺の言葉に「そう」と短く返答してくれる。

そうだそうだ。この際、素敵なお姉さんである固法さんについて説明しておこう。

固法さんは風紀委員第177支部に所属している風紀委員で、白井ちゃんや初春ちゃんの先輩だ。ジャケットメント面倒見が良く、尚且つ厳しさを併せ持つ理想のお姉さんである。

セミロングヘアに眼鏡をかけ、着痩せするプロポーションの良い容姿を持つ、巨乳のクールビューティーというコチラに関しても理想のお姉さんである。

ここで注意するのは“お姉さま”でなく“お姉さん”だ。これだけは譲れないぜ。

「固法さんこそ、今何してるんですか？」

歩いていた方向が同じだったので、一緒に歩きながらそんなことを聞く。まあ風紀委員の腕章をつけているので昨日の白井ちゃんと同じくパトロールか何かだと思うけど。

返ってきた言葉は予想通りと言って良いのかパトロールとのこと。

「じゃあ、俺お手伝いします」

「そんな、良いわよ。高峰君は病院に行くんでしょ？それにこれは風紀委員の仕事だしね」

固法さんの諭すような言葉。そういうところがまた良いんですね。

「いえ、全然急いでないので大丈夫ですよ」

これは本当の事。急いで病院に行かなくても良い。別に届ける荷物も生モノってわけでもないし、すぐ届ける必要もない。

「あら、そう？ならお願いしちゃおうかな」

「はい。こちらこそよろしくお願いしますね」

こう言うては何だが、この時の自分の顔は物凄い笑顔だっただろう。表現がおかしいかもしれないが、物凄い笑顔だ。他に表現できる言葉が思いつかないのでこれで勘弁してもらいたい。

なんせ、固法さんとは久しぶりに会ったんだ。おそらく一カ月ぶりぐらい。メタ発言OKなら五カ月ぶりだ。おっと、失敬失敬。

つまり、久しぶりに会えて俺は舞い上がっているわけだ。次会えるのはいつになるかわからないから今日の内にいっぱい固法さん成分を摂取しなければな。

そんな頭がイカレたような事を考えつつ、俺は固法さんと一緒に第七学区のパトロールを始めたのだった。

固法さんとの治安維持活動の一環であるパトロールと言う名の散策デート（高峰による事実の脳内変換アリ）は二・三時間ほど続いた。

とにかく楽しかったんだよ。

最近は『アイテム』の方でシリアスな感じ一辺倒だったし、表の日常も周りにいるのは元気の良い女子中学生たち。なんともまあ、気苦労の絶えないメンバーだな。

だから、年上の固法さんとののほほんとした散策デート（高峰による事実の脳内変換アリ）は、疲弊していた俺の精神を心の底から癒してくれるものだった。

別れ際に「今日はありがとね。お茶ぐらい出すからいつでも第177支部にいらっしゃいね」と言われた時は、一瞬世界の終わりで、も近付いて来ているような錯覚にまで陥ってしまった。

つまり、アレだ。

高峰晶。十五歳。心の洗濯、終了しました。

第177支部の方向へ固法さんが歩いて行き、姿が消えるのを見守ってから俺は小さく一礼するのであった。

時刻は夕方。夏だからという理由で未だ太陽は燦々と輝いており、気温はともかく紫外線は俺の能力で調整できないので、太陽光が忌々しい。

というか、先ほどの散策デート（高峰による事実の脳内変換アリ）で固法さんのために気温は調整したのだが、女の敵である紫外線をカットすることが出来なかった自分に文句を言いたかった。

固法さんのお肌に染み・そばかすが出来てしまったら、どうするんだと。まあ俺の能力ではどうする事も出来ないのであるが。

カエル顔の医者が院長を務める病院の敷地に入る。

「そついや、この病院に入るのも慣れちまったな」

入院したり、通院したり、他人のお見舞いに来たり。表向きの理由はこんなもんだが、他にも色々な理由で俺は度々この病院を訪れていた。

既に顔馴染みになりつつある、受付のナースのお姉さんに軽く頭を下げ、病院の中を突き進む。

だが、

「あつ、アキラだっ！」

「よーッス。高峰」

旅行カバンを持ったツンツン頭の少年と白い修道服を着た銀髪シスターに出会ってしまったので、自然と俺の足は止まる。

「こんにちは、上条さん。それにインデックスも」

口ではそんな冷静な対応であったが、内心は滅茶苦茶だった。

うお、インデックスだ！？今日は固法さんにも会えやし最高の日と言っても過言でないぐらいだな。

「ねえねえ、あきら。その手に抱えている紙袋には何が入ってるの？もしかしてリングゴでも入ってるのかな？」

物欲しそうに俺の手にする紙袋を見るインデックス。紙袋はインデックスの目線より上に抱えているため、上目づかいで可愛い。

抱きしめたい……が、そんなことをしたら俺も変態の仲間入りになってしまうので泣く泣く諦めることにする。

「こらっ、インデックス。人様にたかつてはいけません！」

「ハハッ、別に良いですよ」

俺は「ほら」と言いながら、屈んでインデックスに紙袋の中を見せる。食べ物が無い事実を知り、インデックスはしゅんとした。

ふふ、これが今日までの餌付けいんこけの成果よ。俺のことを食べ物とくれる人間だと認識させておくことによって、俺と会うと嬉しいことが起きると学習させておく。なんか、犬の調教とかに使いそうな手法だが、俺にとってインデックスはワンコと変わらないので万問題無い。

しゅんとしているインデックスも可愛いのだが、長時間見ていると心が痛むので、すかさずボンのポケットから飴玉を取り出し御機嫌を取ることを忘れてはならない。

「それにしてもその荷物はどうしたんですか？」

飴玉を可愛らしくリスのようにほっぺたに収納したインデックス

を横目に見つつ、上条さんが持っていた旅行カバンについて聞いてみる。

「今日までちよつと入院しててな。それでさつき退院してきた」

「ちよつと、ですか……」

「ああ、ちよつとな」

そう返した上条さんは俺から視線を外す。

ちよつとね……。ちよつとか。この人はそのちよつとで誰を救ってきたのかね？

そのことをちよつとと言ってしまえる。それがどれだけスゴイことだとこの人は知っているのだろうか？

普通に人なら誰かを助けたならそれを誇るだろう。他人に話すことで優越感に浸ったり、自分の中で己は他人を助けたんだと満足感を得る。

例外はあるだろうが警察や消防などの人命救助を仕事にしている人ならともかく、ただの高校生である上条さんが誰かを助けることを当然だと思っている。

本当にこの人の器はどれだけ大きいんだろう。さすが物語の主人公だよな。

「じゃあ、もう俺たちは行くよ。じゃあな、高峰」

「はい、それではまた会いましょう、上条さん」

どこまでもカッコ良い上条さんに別れを告げる。

「ほら、行くぞインデックス。早くしないとスーパーが閉まってまた晩飯がそうめんになっちまうぞ」

「あ、ちよつと待ってかも、とうま。ばいばい、あきら。飴玉ありがとうなんだよ」

先に行ってしまった上条さんをインデックスが早足で追いかける。

そんな微笑ましい光景を見つつ、俺はあることに気づく。

「あれ……？上条さんが度々入院するって事はこの病院で張ってれば簡単に魔術サイドに介入出来た臭くないか？」

衝撃の事実である。もう大まかなストーリーしか頭に残ってない原作知識であるが、上条さんのお見舞いに神裂さん家の火織ちゃんや土御門とかが来ていたような気がする。

俺のバカあああああ！！なんでそんな大事な事憶えて無かったんだよ！？それさえ憶えていれば、最低限の魔術サイドとの繋がりを持てたと言うのに本当に俺はポンコツだ……。

まあ終わってしまった過去は取り戻すことは出来ないので素直に……多少悔いは残るものの諦めるしかないな。

それにこの先も上条さんは幾度となく入院することになるんだ。機会は沢山ある。そう悲観するモノでもない。

そういえば今回は何で入院したのか詳しく聞いてないな……って、俺のバカああああああ！！それさえ聞いていれば今が原作のどの辺りなのかハッキリしたのに、どうして聞かなかったんだよ！？

まあ終わってしまった過去は取り戻すことは出来ないので素直に……多少悔いは残るものの諦めるしかないな……なんて言えるかボケええええええええ！！！！

立て続けの二度のショックな出来事に俺のテンションは一気に最低辺まで落ちる。

「はぁ……、行くか」

まるで幽鬼のように俺は目的地へと歩を進める。ちょうどここは病院だったので、なんとも言えない迫力が出てるような気がする。まあ、そんなことは今の俺には関係ないがな。

歩いているとモーゼの十戒のように自然と道が開けていく。「ひいい」や「出たああああああ！！」と叫ぶのは失礼じゃないか？

関係者以外立ち入り禁止という階段を下りて、地下に潜る。

そう、俺の目的地は地下一階にあるとある部屋だ。

「入るぞー」

返事を待たず、目的の部屋に立ち入る。特段、気にする相手でもないし。

「あ、高峰さんでしたか。こんばんは、とミコは丁寧な挨拶をします」

そんなわけで、ここは病院内にあるミコの部屋だ。いつも通りの常盤台の制服にゴーグルを額に掛けた状態でミコは俺を迎えた。

「ほれ、昨日御坂がうるさかったから洋服持ってきてやったぞ」

あー、本当に御坂ちゃんはメンドクサイなあ。おかげで朝から女物の衣服を購入すると言う一大イベントを体験させられたよ。というか、レジにいた女性店員の視線が痛かった。

それならミコと一緒に買いに行けばよかったのだが、それだと色々とメンドクサイことになりそうだったから止めといた。また白井ちゃんに会うとかフラグはびんびんである。

そんなわけで、俺が買った衣服の詰まった紙袋を渡す。

「開けてみても？」

「ああ、ミコのために買ってきた物だから一々聞かなくても良いぞ」

俺の買ってきた衣服はいたって普通の物ばかり。テキトーにセー
ル棚から選んできた物ばかりだ。

そして、

「これは？」

ミコはある一着を手俺に訊ねてくる。

「見ればわかるだろ」

「はい。わかりますが、このセーラー服は高峰さんの趣味ですか？」

おい、誰だミコに変な事教え込んだのは！？

「バ、バカ、違うよ。一応、学校に通ってなくてもミコは年齢的にどこかの学校の制服着て無いと不自然だろ？」

ち、違うんだよ。セーラー服は俺の趣味じゃないって！？制服を捜してたらたまたま見つけただけなんだって！隣にブレザー型の制服もあったけど、こっちの方が安かったんだって！？

たしかに最近の俺は金回りは良いけど、やっぱり節約は必要だしさ。

「むー……」

じと目だ。ミコがじと目で俺を見てくる。

「……………」

「……………」

しばしの視線の応酬の結果、俺は勝利した。ふ……、甘いぜ、ミコ。

「それでは、高峰さんはミコが合図するまで部屋から出ていってください」

「何でだ？」

「ミコ自身は別にかまわないのですが、ミコの着替えを見ますか？」

はい、ごめんなさい。個人的には物凄く見たいんですが、後で御坂ちゃんに知られたら殺されるような気がするのでさっさと部屋から退散させてもらいます。

そんなわけで、一旦部屋から退散し、ミコが着替え終わるまで待ち、最後入室する。

「どうですか？とミコは端的に感想を窺って見ます」

俺の目の前には年相応にセーラー服を披露するミコがいた。ただし、目は死んでいるのが残念でならないが。

「良いんじゃないか」

自分の少ない語彙が悲しくなってくる。何と言って良いのだろうか。簡単に言えば御坂ちゃんが初春ちゃんや佐天ちゃんが通う柵川中学の制服を着ている感じだ。ただ付け加えるなら、額に付けた無骨なゴーグルがミステリアスな雰囲気を漂わせている。

そんな俺に対し、ミコを短く返す。

「そうですか」

部屋が沈黙で包まれる。ミコが何考えているのかわからないが、俺は何を言っただけ良いのかわからなかった。

「高峰さん」

「ん？」

先に沈黙を破ったのはミコだった。

「わざわざミコのためにありがとうございます」

「気にすんなよ。特に痛い出費ってわけじゃなかったしな」

どちらかというと、これ以上ミコに常盤台の制服を着てせいたら俺が御坂ちゃんにフルボッコにされてしまうんだ。出来るだけは早い方が良かった。

「大事にさせていただきます」

そう言ったミコの顔はちょっと笑っていた。

先ほどまで考えていた事なんて忘れて、俺はミコに感情が芽生えつつあることを素直に喜ぶことにした。

．．．to be continued?

“ちゃん”付けの境界線について討論しないか？

第四話【九月十四日？】

今日、俺は学校をサボる。正確には「特例公欠」というモノなのだが、感覚的にはただのサボりと変わらない。それに俺の進学先は既に第十八学区にある、とある有名な高校から推薦を貰っているの
でそれほど気にしなくても良い。

「で、今回の依頼は？」

俺は腕を組み、壁に背を預けながら呼び出した張本人に訊ねる。

場所は『アイテム』が利用している隠れ家の一つ。メンバーが座れる分だけのソファーと大きなテーブルがある以外殺風景な部屋だ。
というか、新参者の俺が座る椅子が無いのはどういうこと？

「最後にやって来て偉そうな態度は超頂けないです」

「結局さ、高峰が遅刻してきたのは責められるべきな訳よ」

「そうね。これはお仕置きが必要かしら？」

え？なに？俺がいけないの……？

「って、ちょっと待ていつ！少し遅れたのは謝るが、別に好き好んで偉そうな態度してるわけじゃないぞ！」

腕組んで壁に背を預けていたのはカツコつけたかっただけだい。

「それになんで俺だけ立たされてるんだよ！せめて椅子を用意して
いてくれよ！」

いかんいかん。なんで俺がツツコミ役を引き受けることになって
るんだよ。この世界のキング・オブ・ツツコミ役は御坂ちゃんのモ
ノであつて、俺が気安くツツコミなんてやつちゃいけないんだよ！

俺のツツコミに対し、『アイテム』の面々の反応は酷いモノで、
端的に表すなら「えゝ」っていう巷の女子高生的な反応だった。

く、くそう！この場所には俺の味方はいないのか！？

味方を求め辺りを見渡すと、味方になってくれそうな人物を発見
した。ピンクのジャージを着ている滝壺だ。

滝壺だけは先ほどのやり取りには参加しておらず、ボーっとして
いた。

「滝壺からコイツらに何か言っちゃってくれよ！？」

藁をも掴む思いとはこのことかもしれない。何て言ったって、あ
のボーっとしていることに關しては他の追随を許さない滝壺に助け
を求めるのだ。そもそも滝壺が助けてくれる保証なんてない。だが、
一縷の望みをかけてみるのが男である。

そんなわけで、いざ助けを求めてみたわけだが、しばらく経つて
も滝壺の反応は無い。

「ふふふ、滝壺に助けを求めるなんて超甘いですよ」

いつまでたっても呼び掛けに答えてくれない滝壺を横目に見つつも絹旗の言葉に耳を傾ける。

「な、なんだとう!？」

訳がわからなくて、こんな場面で素っ頓狂な声が出てしまう。そんな俺を面白いモノとして見るようにフレンドが笑う。

「まあ、しょうがないよね。結局は滝壺な訳だし」

ハッ!?ここでまさかの事実気づく。

な、なんていうことだ……。まさか最初から俺には救世主^{メシア}なんて現れてくれないと決まっていたなんて。

「何で、滝壺は目を開けたまま寝てんだよっ!」

その驚愕の事実には俺は膝から崩れ落ち、地面に這いつくばる。

「所詮、高峰は高峰でしか無かったって事ですね。超残念です」

わざわざソファから立ちあがって、俺を見下ろす絹旗。フレンドはケラケラと楽しそうに爆笑していた。

そんな中、途中から俺たちを見てん楽しんでいた麦野が手をパンパンと叩き皆の視線を集める。

「はい、おふざけはここまで。仕事の話をするわよ」

アンタもさつきまで楽しんでいたじゃないか！？つと言いたかったが、我慢する。だって『原子崩し（メルトダウナー）』で風穴なんて開けられたくないし。

そのままテキパキと麦野は眠っていた滝壺を起こし、場の空気をピリツとさせる。

うーん、ピリツとさせるつてのが俺の感覚的なモノだからわかんないかもしれないけど、要するに仕事場の雰囲気ってとこかな。

というか、さきほどまで俺と騒いでいた絹旗とそれを見て爆笑していたフレンドが急に静かになり仕事モードになっているのはさすが暗部組織である『アイテム』のメンバーってところだよな。

俺もそれを見習うように真剣に続く麦野の言葉に耳を傾けることにする。

「今回のターゲットはコレよ」

そう言つて、麦野は一枚の写真をテーブルに投げ出す。他のメンバーは身を乗り出す様に写真を確認する。

「コイツを超抹殺すれば良いって事ですか？」

「なら今回は簡単だよな」

写真には高級そうなスーツを着た一人の男が写っており、一見しただけではこの男を抹殺って事だろうかと思う。

はあ……、やっぱり殺しは慣れない。いや、正確にはまだ俺は人を殺したことが無い。今まで殺しの依頼があると、大抵は俺と滝壺以外の誰かがそれをこなしていた。

だが、殺しと聞くだけで俺の中で何かが生まれた。

俺が向かうのは大抵生きたまま捕獲モノばかりだった。それは能力的なモノだったり、まだ闇に足を踏み入れたばかりの俺には人間を殺すことが出来ないとでも判断されていたと言う事なのだろう。

それはある意味ではありがたい事なのだが、この先人を殺さなければならぬ状況が確実に来ると言う事実を突き付けられているように何か嫌だった。

「いいえ、今回のターゲットはこっち」

麦野は俺たちの考えを否定するように写真の徒ある部分を指差す。

それは高級そうなスーツを着た一人の男が手に持った旅行用のキャリアケースだった。

キャリアケースとは、スーツケースぐらいの大きさで底に車輪がついており、個人の旅行用カバンというよりはスチュワーデスが使っているような印象を受けるカバンだ。

要するに今回の依頼はこのキャリアケースの奪還ということだろう。

「中身は何だ？」

中身によつては奪還する際に慎重にならなくてはいけない。

「さあ？詳しく聞いてないからわからないわ。ただ、ある程度は乱暴にしても問題ないそうよ」

それを聞いたフレンドがニヤリと笑う。

「てことはあ？」

「ええ。ターゲットを確保した者がギアラ半分ゲットってことかしら」

「やったー。クソつまらない仕事かと思ったけど、結局は金しだいって訳よ！」

はあ……、この『アイテム』のノリにも未だ慣れて無い。何故か良く分からないが『アイテム』ではしばしばゲームが行なわれる。

しかもそのゲームは質の悪いことに大抵の場合はこんなターゲットを奪還するような依頼で行なわれる。

一応、これも立派とは言えないが仕事なんだから真面目にやって欲しい。

「俄然、超やる気出てきました」

「がんばる」

絹旗と滝壺もギアラ半分ゲットと聞いてやる気を満ちらせている。イマイチ滝壺のやる気メーターが解読できないが、ミコを相手に少

しだが感情を理解出来るようになった俺の能力を持つてすればなんとなくだか分かった。

おっと、今はそんなことを考えている暇は無い。

何て言っただって『アイテム』で行なわれるゲームには罰ゲームがつきものだからな。最低でもそれを回避するためにも頑張らなくては。

「で、どうしてこういうチーム割になっただんだ？」

「それはこっちが超聞きたいですよ。でも麦野の決めたことだから従わないと後が超怖いですけどね」

はあ……、そんなことはわかってるよ。俺の今は劣化して少なくなってしまったが原作知識によると、あのヤンデレさんはとても我が侘だからな。というか、俺が『アイテム』に入ってから付き合ってもそれは窺えた。

どこまでも自己中心的で、自分の思い通りにならないとプチッと頭の中の何かがキレちまう危険人物だ。そのくせ自分が周りにどう見られているか気にする一面もあると言う面倒なヤツでもある。

まあ、基本的には良いリーダーなので問題無いが、会話には細心の注意が必要だ。

「それよりも向こうのチームは何か掴んだのか？」

「いえ、報告がまだなので向こうは進展なしかと」

皆さんもお察しの通りかと思うが、こちらは俺と絹旗。向こうは麦野とフレンドと滝壺。よく分らんが、麦野の独断と偏見でこのチーム割になった。

まあ、基本的に遠距離攻撃が物を投げるしかない絹旗と俺は相性がいいので、その辺りが関係しているかと思うが。

「おつ、ターゲットを超発見しました」

絹旗は手に持つ携帯の画面をこちらに向けながら言ってきた。画面には学園都市の地図が表示されており、俺たちの現在地を表すアイコンの近くでもうひとつ点滅するアイコンがあった。

「ラッキーですね。この距離なら麦野たちの前にターゲットと接触できそうです」

確かに、麦野たちの現在地よりも俺たちの現在地の方がターゲットに近く、これなら麦野たちが到着する前に片付きそうだ。

ちなみにであるが、俺たちが見ている地図はいわゆるGPSというヤツでどこにでもあるような携帯についている機能だ。

しかし、そこはさすが『アイテム』が暗部組織というところだろう。下部組織にターゲットを搜索させ、その位置情報を外部から表示させられるようにGPSのプログラムを弄っている。

そんなわけでターゲットまでの道中をカット。まあ簡単に説明すると走っただけなので特に何にも無かったし。

「はあ、はあ、はあ……、高峰走るの超早すぎですよ」

「ああ、悪い。ちゃんとペース考えて走れば良かったわ」

俺は能力で自分の体温を調整できるので、走ったぐらいでそれほど疲れることは無い。だから罰ゲームが嫌で飛ばしていたのだが、そのペースは絹旗にはツライものがあつたらしい。

俺は首から下げた無骨なゴーグルを装着し、サーモグラフィの機能を使い絹旗の体温を見る。そして、膝に手を当てて息を整えている絹旗の方に手を置き、ちょうど良い体温にしてやる。

何故サーモグラフィカメラを装着したのかと言うと、絶対に温度変化を失敗させないためである。あらかじめ体温を知っておき、それで尚且つ直接触れて体温を変化させてやれば温度変化の制御は完璧なモノになる。

絹旗の体温調整が済むとまたゴーグルを首にズリ下げる。

……どうでも良いけど、何で俺は『アイテム』のメンバーのことを“ちゃん”付けで呼んでないのかな？

一番最初に敵として出会ったのが原因か？いや、でも俺ならそんなことは一切関係なく“ちゃん”付けで呼びそうだな。

とりあえず、脳内シミュレーションしてみるか。

麦野ちゃん……………うん、ないな。どちらかと言うと麦野さんの方がしつくりくる。

絹旗ちゃん……………うん、こつちもないな。やっぱり絹旗は絹旗だ。

フレンドちゃん、滝壺ちゃん。面倒になって同時に脳内でシミュレーションしてみたが、どちらもないと思う。ただ、滝壺ちゃんはちよつと良いかもと思ったが気にしない方向でいくか。

「超仕事中です。滝壺みたいにボーっとしないでくださいよ、高峰」

「んお！？悪い悪い、ちよつと脳内シミュレーションに手間取っちゃったよ」

息を整えたらしい絹旗が俺を現実へと引き戻す。

「シミュレーション……………？まあいいです。それよりもアレがターゲットです。さつさと麦野たちが来るまでに片付けてしましましょう」

「ああ、そうだな」

俺はターゲットのキャリアケースを手で転がす男に視線を向ける。写真でも分かっていたが、キャリアケースは人ひとり入りそうなくらいの大きさで、死体でも入っているんじゃないかと勘繰ってしまった。

場所は人通りの多い大通り。男は手に持った携帯の画面を見ながら歩いている。俺たちから男までの距離は二十メートルと言ったところだった。

「なあ、人目は気にしなくていいのか？」

一応、これでも『アイテム』では新米のペーパーなので、先輩にお伺いを立てることにする。というか、先輩が歳下か……。まあ、実年齢知らないから実はロリっこ高校生と言う可能性も捨てきれないが。

「確かに人目は超邪魔ですね。しかし、グダグダしていても麦野たちが来ちゃいますし、いつそ人目なんて無視するのも手ですね」

ふーむ、とアゴに手を当て考え出す絹旗。個人的には少し様子を見て、あの男が人通りの少ない場所に移動したらキヤリーケースを奪うつてのが良いと思った。

素直にその考えを絹旗に伝える。

「なら、それでいきましょうか」

「良いのか？まだまだ素人の考えを採用しちゃっても？」

「現状ではそれが一番良さそうですしね。まあ、失敗しても最終的に超力ずくで奪えば問題ないわけです」

うわあ、なかなか物騒なお考えで。確かに信用を落とすことにも繋がるし、依頼は絶対に達成させなければならぬ。だから最終的には力ずくに落ち着くか。

そんなわけで一先ず様子見ということで尾行を開始しようと思った矢先、思わぬことが起こる。

なんと、キャリアケースを持った高級そうなスーツを着た男が十人近くの男たちに囲まれ、なんとキャリアケースを奪われてしまったのだ。

「超迂闊でした。私たちの他にもキャリアケースを狙う者達がいたなんて考えもしませんでした。ただまあ、これで後はそいつ等から超横取りすれば良いだけなので結果オーライなのかもしれませんね」

人目を気にする必要も無くなったわけですしね、と言葉をつけたした絹旗はキャリアケースを奪った男たちを追い走り出す。慌てて俺もそれに続く。

はあ……、なんか面倒になってきた予感。

．．．to be continued?

死刑宣告ってやつは誰であろうと恐ろしいものさ

第五話【九月十四日？】

走る。駆ける。疾走する。とにかく俺は目の前で走っている絹旗を追いかけている。

理由は簡単。それが仕事だからだ。仕事って言っても、やることしていることはそこら辺にいるチンピラどもがやりそうな引っ手繰りみたいな事なのだが。

簡単な仕事だった。男からキャリアケースを奪うだけの簡単なお仕事。

だが、人目を気にして動けなかった俺たちをあざ笑うかのように眼の前でそれが起こった。

奪われてしまったのだ。俺たちが奪うはずのキャリアケースを十人ぐらいの少年たちが男を囲み一瞬で。まあ、それによって簡単なお仕事が更に簡単なお仕事に変わったから感謝しても良いけど。

だって、見たところ十人ぐらいの少年たちは男からキャリアケースを奪うとき能力を使わなかったんだぜ。俺の見立てではきつとスキルアウトなのだろう。

もし彼らが能力者の集団だったら舌打ちをしたかもしれないが、能力を持たないスキルアウトだったのなら簡単にキャリアケースを奪うことが出来る。

それに少年たちはキャリアケースを奪った後、人目の無い裏路地に逃げ込んでいたのでそれが簡単なお仕事が更に簡単なお仕事に変わった理由でもある。

もともと俺たちが男からキャリアケースを奪う過程で躊躇っていたのは人目を気にしていたからである。だから少年たちが人目の無い裏路地に逃げ込んでくれるのはこちらとしても助かる事この上ない。

ちなみにではあるが、少年達とか言っているがどう見てもあちらさんの方が年上なのは言うまでも無い。

「高峰」

「あーはいはい」

裏路地を全力疾走してついてくる俺たちに気がついた少年たちは、半分の人数を俺たちの足止めに残して残りのヤツらがキャリアケースを持って逃げる。

下っ端の俺は上司の命令には逆らえず、スピードを緩めず少年たちの間をかき分けるように突っ込む絹旗の邪魔にならないように、俺たちの行く手を遮る少年たちの体温を下げ強制睡眠状態へと陥れる。

バタバタと倒れる少年たちを尻目に見ながら俺たちは脚を止めずに駆ける。

「あー、もう。超メンドクサイです」

絹旗はそう言うと、近くに設置されていたエアコンの室外機を残り半分になった少年たちめがけてぶん投げる。

ここで説明しておこうか。絹旗の能力はレベル4の「オフエンスアーマー窒素装甲」。窒素を自在に操る能力で、窒素越しになら現在進行形でやったように室外機を投げたり、自動車を持ち上げたりできる。さらに銃弾まで受け止めたりでき、防御面もバツチリと言う凶悪能力である。

ただ、ここで絹旗を勘違いしちゃいけないのは、彼女は怪力では無いと言うことだ。あくまでも窒素越しに物体を持ち上げたりしているだけなので勘違いは良くない。

また、絹旗も俺と同じように無意識下の能力使用を行なっており、狙撃などの不意打ちでもその弾丸を窒素が受け止める。……ああ、俺の能力と交換して欲しい。

そんなわけで、無事と言うか何と言うか室外機はキャリアケースを持った少年に直撃し、その少年は室外機に潰された。

あれ……死んでね？

まあ、今そんなことは些細な事なので仕事に集中する。

少年たちの顔に動揺が走った隙を利用し、俺が彼らに接近し先ほどの少年たちと同じように昏倒させる。

「ふう……。たまに走るのも超健康的に良いかもしれませんね」

おい、そんなことを言うより室外機に潰された少年を助けてやれ

よ。まあ、無駄なのはわかりきっているので俺が室外機を退かしてやる。息も絶え絶えと言うところか。ま、俺が出来るのはここまでだから頑張って生きてくれ。

そんなこんなでキャリアケースを奪取した俺たちは麦野たちに連絡を入れた。

『はあ……今回のゲームはアナタたちの勝利ね。報酬のギャラ半分は持って来なさい』

とは、麦野のありがたいお言葉。とりあえず、これで今回の仕事は終わったわけだ。

俺はキャリアケースを転がしながら、先に歩く絹旗の後に続く。ゲームに勝利した絹旗は鼻歌を歌ったりして上機嫌である。

「てか、これ何入ってんだろうな？」

俺は自分が引つ張るキャリアケースに視線を向ける。

「そんなこと超どうでも良いじゃないですか。ふふ、明日は久しぶりにシヨッピングです」

いや、確かにどうでも良いことなだけどさ。でもこの中身によって不幸になる人が出てくる可能性を考えたら、なんだか遣る瀬無い気持ちになってくる。

もし『アイテム』がこの依頼を受けなければ、もし俺たちが奪取に失敗していたら。もしものは無限にあるけれど、どれが最良の選択なのかは未来のことだからわからないわけで、どうしようもな

いんだけどさ。」

あー、ホントに何入ってんだよ。キャリアケースの下部に車輪がついているから持ち運びが楽になってるけど、無かったら重すぎて運びづらい事この上ないはずだ。

「あれ……？」

「どうしたんですか、高峰？」

何故か先ほどまで感じていた重さが急に無くなった。先ほどまでキャリアケースの取っ手を握っていた右手を何度も開閉させる。だが右手は空を切る

あれれ？

「って、キャリアケースが無いーっ！？」

「何やってんですか！ホント、高峰は超使えませんね」

急いで辺りを見回す。だが、キャリアケースは元より人っ子一人見当たらない。

「これはマズイ……超マズイですよ高峰。これが麦野に知られたらお仕置き確定です」

絹旗の額から脂汗がダラダラと流れ出る。

そこまで麦野のお仕置きはヤバいのか？俺はまだ新入りで経験したこと無いんだけど……。いや、確かに麦野は原作でフrendaを殺

しちゃっぐらいヤバイヤツだけど。

「マジでヤバいの？」

「マジでヤバいです」

俺と絹旗は顔を突き合わせ盛大に溜め息をついた。

何なのよ、もう。あんなヤツらが出てくるなんて予想外も良いところじゃない。

バクバクと鳴り響く心臓を抑えつけ、出来る限り息を殺す。

私がビルの屋上から見下ろす狭い路地には中学生くらいの男女が責任の擦り付け合いを始めている。

そんなことはここではないどこかで始めて欲しいモノと思う。

私は自分の身体が入りそうなくらい大きいキャリーケースを強く抱きしめ、彼らが去るまでじっと息を殺すことにする。

何故なら私は彼らの事を知っているからだ。あの人の近くにずっといたから学園都市の内情について少しばかり知識があった。

絹旗最愛と高峰晶。

彼らは学園都市暗部である『アイテム』に所属し、表沙汰には出来ない依頼をゲーム感覚で請ける頭のイカれた組織だ。

それでも高峰晶はあの実験後『アイテム』に所属したという経緯があるから、未だ闇に染まり切って無いという希望は残されている。

だが、絹旗最愛は違う。彼女は『アイテム』発足時からのメンバーで、人殺しに躊躇うような神経はしていないだろう。それに他の『アイテム』のメンバーを呼ばれたら更に厄介なことになる。

どうして……、どうしてよっ！

私が彼らと単独で戦闘を行えば十中八九私が敗北する。

奇襲攻撃を仕掛けても絹旗最愛には効かず、それが失敗したらいとも簡単に高峰晶に無力化させられてしまうことだろう。

私はただ真実を知りたいだけなのに、どうしてこんなにも障害が立ちはだかってゆくのか！？

私の眼下では責任の擦り付け合いが一段落して、絹旗最愛がどこかへと電話をしている。早く立ち去ってくれればいいと思うけれど、それは高望み過ぎる。

せめて私が見つからなければ良い。

そして、

「——ッ!？」

私と絹旗最愛の視線が交差した。

その後、一通り責任の擦り付け合いを俺と絹旗は繰り広げたが、そんなことよりも早いところキャリアケースを奪還すれば良いんじゃない？って、結論になった。

そうと決まったら行動が早い小さいけど俺の先輩である絹旗。

どこかへ連絡して、一言二言言葉を交わすと頭上を見上げる。その行動に疑問を持つも俺は周囲への警戒を忘れない。

「超発見しました」

「はへ？」

突如としてロリータな先輩の口から発せられた言葉に何とも情けない返事をしてしまう。

慌てて俺も絹旗の視線の先を見る。

ビルの屋上に人影らしいモノが見えたが、それは一瞬のことですぐに俺の視界から消えてしまった。

「さあ、高峰。私はエレベーターに乗って屋上まで行きますが、その階段を超ダッシュしてきて下さい」

絹旗が指差すのは非常階段と思われる外に野晒し状態の階段。

「え……？なんで俺が階段？」

あまりにも理不尽な要求に不満を漏らす。だって、地上五階建ての建物を階段を使って駆け上がれて言ってきたんだぜ？さすがの俺も不満に思う。

そんな俺に対し、絹旗は溜め息を一つ吐くと一言。

「逃げられたらどうするんですか。完璧にお仕置き確定ですよ」

ああ、なるほど。二人してエレベーターを使うと階段で逃げられる可能性があるってことか。納得納得。

だけど何故俺が階段？……っていう言葉を口にしようかと思ったが止めておいた。だって、一応俺の方が年上みたいだし男だし。いくらでも回答が思いついたからな。

と言うわけで、ここで絹旗とは暫しの別れとなって、俺は階段を駆け上がる。

これがまたメチャクチャしんどい。普通に平坦な道を走るならさほど疲れない俺だが、さすがに階段はつらいモノがあった。

「はあ、はあ、はあ……」

俺が息も絶え絶えに屋上まで辿り着くと、ちょうど絹旗も到着していた。

俺スゴクね？五階建てでエレベーターと同時に屋上に辿り着いたんだぜ。正確にはエレベーターは五階で泊まってそこから屋上へと昇る階段を使っていたようだが、それは些細なことか。

だがしかし……とこの場合は言っても良いだろう。屋上には人っ子一人いなかった。

人が隠れられそうな空間は貯水タンクの裏ぐらいだけどそこにもいなかった。

どうやらキャリーケースを奪ったヤツは五階でやり過ごして、俺たちが屋上に入ったその隙に逃げたようだ。

うわぁー。マジでやべえ……。

あまりのヤバい事態に絹旗も頭を抱えて現実逃避している。

『お仕置き確定ね』

あれ……？なんか幻聴が聞こえてきた。麦野の声みたいだったけど、きつと幻聴で良いんだよね？

あわわあつわああわわああわわああわわ。

もうダメ。俺は死ぬんだ。

さよならインデックス。さよなら固法さん。それに佐天ちゃんに御坂ちゃん、あと白井ちゃんと初春ちゃんも。

どうやら俺、この後死ぬみたいです。

先ほど幻聴かと思っていた麦野の声は、俺が持たされた無線機から聴こえてきた声で、色々とオワタ。

というか、何で俺はさつきサーモグラフィ機能付きゴーグルを使ってキャリアケースを奪ったヤツを捜索しなかったんだ！？その首から提げているゴーグルはカッコつけるためだけの装飾品に過ぎないと言うのか！？

うー、自分を責めても仕方が無いのはわかってているが、自分のへボさ加減に憂鬱になる。

マジでどうしょ。

麦野からはそこから動かず待機してろって言われたけど、これって確実にお仕置きまでのカウントダウンして良い感じだよね？

「なあ、麦野のお仕置きってどんな感じなの？」

経験者だと思われる『アイテム』の先輩に訊ねてみる。

すると先輩は青い空を眺める。ここが屋上と言うことで風が吹き荒れ、その風を受けて何とも喪失感漂う雰囲気醸し出している。

「ハハッ……、我慢、超我慢しかないんですよ」

俺とは視線を合わせず遠い目をして先輩は答えた。

え？我慢しかないとか、どんなお仕置きなわけ！？

いや、本来お仕置きとは我慢するモノだけど、それにしてもあの先輩が遠い目をするなんてどんだけ我慢するんだよ……。

絹旗の反応を見る限りソツチ系の期待しても良いんでないか？

ソツチ系とは言わずもがな工口的な何かである。

ぐへへ。想像しただけで羞恥のあまり恥ずかしがる絹旗の姿が目
に浮かぶ。自分もお仕置きされる側なのは置いておいて、とにかく
絹旗の裸に興味がありますです隊長っ！

と、まあ恒例の現実逃避をしていると、俺たちも使った屋上の扉
が開く音がした。俺と絹旗の視線はそちらへ向かう。

ああ、お仕置き嫌だなあ……。

「高峰さん及び絹旗さんを回収に来ましたと、ミコは与えられた指
令を継続します」

何故にミコが！？

「な、なんでミコがここに！？」

当然の疑問。絹旗はやって来たのが麦野じゃなくてホツとしてい
る様子。

「なんでと問われましても、麦野さんからアナタ方の回収を頼まれたからですか？」

ミコは俺とお揃いのゴーグルをかけた額を首ごと傾ける。ちなみにミコの服装はセーラー服だと言っておこう。

いや、うん。さっきの邂逅一番の言葉でそれはわかってるんだけどさ、なんでミコがその役目を担ってるかが俺には疑問なんだよ。

まあ良いや。とりあえず、お仕置きまでの時間が少し伸びたと思えば良いか。

．．．to be continued?

死刑宣告ってやつは誰であろうと恐ろしいものさ（後書き）

もうタイトルはどうでもいいやと妥協。

前作に旧約ってつければ解決するんじゃないか？と思ったがなんか微妙なような気がする。

そして今話はちょっとした冒険を試してみた。

お分かりだと思うが主人公以外の一人称を書いてみた。

今までは主人公の一人称以外は三人称で書いていたが、自分の三人称の下手さに嫌気が出ているので実験的に書いてみた。

書いてみて思ったことだが、主人公以外の一人称を書く物語に深みが出来ような気がする。

ただ弊害として物語の進行が微妙に遅れることも気付いた。まあそこは作者の技量によると思うのだが。

お仕置き回避のためなら何をしても許されるんです

第六話【九月十四日？】

土下座。土の下に座ると書いて土下座……、つまりは人生三度目になる土下座。

誠心誠意込めてフローリングに額を擦りつけて許しを請う。隣に視線を向けてみればどうように絹旗も土下座状態である。

一度目は理不尽な理由で常盤台コンビに。二度目は街の清掃活動を自主的に手伝っていたという理由で白井ちゃんに。

そして三度目の土下座に至ると。

いや、ねえ。今回のことは全面的に俺たちが悪いので、素直に謝って来たるべき災厄と言っても過言ではない麦野のお仕置きを回避しなければならぬ。これは危険度レベルMAXの重大任務である。

俺は同じく失態を犯した絹旗と協力してなんとしてもお仕置きされないようにしなければならなかった。

「これは超緊急事態です」

「わかってるよそんなこと」

互いにフローリングに額を擦りつけながら麦野に聞こえないぐらゐの小声で器用に会話する。

「どうしますか」

「麦野を褒めて褒めちぎって、褒め殺しという案を提案したいのだが」

「通常時の麦野なら超有効そうな方法ですが、お仕置き確定の今となつてはおそらく無理でしょう」

「ならどうすんだよ」

「ふふつ、私に秘策があります」

秘策…だと……？それで助かるんなら俺は何をしたって良い。

「俺は何をすればいいんだ？」

「高峰は黙っててください」

絹旗はにんまりと口を歪ませてから顔をあげ、俺を指差す。

「麦野。今回の失態は全部高峰のせいです。お仕置きするならコイツだけにしてください」

まあ、確かに今回のことは俺が持っていたキャリアケースを奪われてしまったのが原因だしな。それに敵を探索する時にゴーグルをつけなかったのも悪かったと言えば悪かったな。

「……で、ちょっと待てえいっ！」

危つく全ての責任を俺に擦り付けられるところだった。この娘なかなかなりおる。

「確かに俺にも悪いところはあったけど、その場に一緒に居た絹旗もお仕置きされるべきなんじゃないのか!？」

もうこうなったら自棄だ!

自分がお仕置きされるのを前提として、この裏切り者も絶対にお仕置き被害者の会に参加させてやる!

「直接の原因を作ったのは高峰じゃないですか。全ては高峰の超責任って訳ですよ」

「何をお!!」

二人して正座で言いあいをしているモノだから、その光景を見ていたフレンダがゲラゲラと爆笑している。滝壺とミコの無表情コンビはソファアに二人並んでボケェーとしていた。

あつ、言い忘れたけどこの場所は朝に集まった『アイテム』の隠れ家だ。まあ今状況にそんな情報にどんな意味があるのかと疑問に思うが。

俺が一方的に噛みつきそれを絹旗が冷淡に往なしていると、麦野が大きく溜め息をついた。俺と絹旗はビビリモノである。

「もういいわ。さつさとキャリアケースを取り戻してきなさい。それでキャリアケースをここに持って来た方のお仕置きを免除してあげるから」

「了解です」

二人してすぐさま立ち上がり、麦野様に敬礼。麦野様のお慈悲には感謝の感情しかない。

ギロツと、同時に視線を合わせる。

「これは生死をかけた超対決になりそうですね」

「ふっ、絹旗なんぞ俺の敵ではないわ」

かくして『チキチキ、むぎのんのお仕置きを受けるのはどっち！？愛と勇気でキャリーケースを取り戻せっ！』が始まった。

午後七時三十分。

残暑厳しい日でしたが、そんなことが些細なモノに感じてしまうほどお姉様と楽しく放課後のショッピングと洒落こんでいましたのに、無粋なことに初春から風紀委員の応援要請の電話が掛かってきた。

初春の態度が多少イライラしましたが、わたくしも学園都市の治安を守る風紀委員としての責務を全うするために、泣く泣くお姉様とのショッピングを切り上げるようになりましたの。

そんなわたくしを、未練も無くにつこにこの笑顔で送り出してくれたお姉様に本気で涙しそうになりましたわ。

指紋、静脈、指先の微振動パターンの三種類の嚴重なロックを外し、『風紀委員第177支部』に入る。

そして、わたくしを呼び出した張本人である派手な花瓶を頭に載せているような印象を受ける初春に声をかける。

「で、何の用ですの？風紀委員なんて山ほどいるくせに、わざわざこのわたくしを呼ばねばならないとはどういう事かしら」

「うーん、冷静に考えると絶対に白井さんじゃなければならぬほどもないような」

コイツ……、

「わたくしがお姉様とお買い物をしていたのを知っていたくせに、そう思うのならもう少し違った態度を取ってもよろしいんではないのですの？」

申し訳なさそうにとか、色々と今の状況に適した態度と言うものがありますわよね。

「ばんざーいッ！」

「逆です！何で両手をあげて大感激ですよ！？」

これはもうアレしかない。思い立ったが吉日とも言いますし、空間移動を使って初春の背後に周りこめかみを両拳でぐりぐりと地味

に攻撃を加えていく。

「ん？」

ぐりぐりついでに初春がわたくしを呼び出した理由を確認するために初春が使っているパソコンの画面を見ると、映っているのはGPS上の地図だった。ところどころに赤いバツ印が描かれている。

「あら。校内の揉め事ではありませんわね」

学校内の揉め事ならGPSなんかより学校の見取り図が表示されているはずだ。

その辺の事情を聴くためにぐりぐりを止めてやると、初春はホツとした顔で説明する。

「マニュアル通り警備員アシスギルの方には連絡は回しましたが、なんか状況が妙なんですよ。じきに警備員から情報提供を求められるのは必至な感じだったんで、私より白井さんの方がテキパキ答えられそうだなーって」

そこまで言い終えて、初春は思い出したように紅茶を進めてきましたけど、やんわりと断っておいた。

初春はガーン！と「せっかく勉強したのに」と落ち込んでいましたが、今はそれどころではない。

「で、結局はどこで何が起きているんですの？」

「問題の事件なんですけど、モノはどうって事はありません。強盗

と言つか、ひったくりですね。でも十人がかりで被害者に襲いかかっていますから、スマートな方法とは思いませんけど」

初春の言葉を受けて考える。

ただのひったくり程度で風紀委員が出動するのはおかしい。

「それこそわたくし達とは縁がなさそうな事件ですわよ」

「こつからなんです問題なのは、目撃者の話によると、盗まれたのは旅行用のキャリアケースらしいんですけど、そのキャリアケースに荷札がついてたって目撃情報があって」

「ようは、旅行用カバンに荷札がついていたんですよ？それが何か問題なんですか？」

「ええっと、まあ見てください。自立型警備ロボットが映像を拾っていたんで、そっちから拡大して確かめてみたんですけど」

初春がキーボードを数回叩くと、新しいウィンドウが開く。そこには、荷札らしき数字と荷主と送り先の名前が書いてあった。

その送り先は自分がよく見知った場所にあると言うことだが……

「常盤台中学付属演算補助施設……？そんな名前、聞いたことありませんの」

「あ、ないんですか。『学舎の園』はコンタクト取りづらいんで確認が難しいんですよ。荷札の番号も照会してみましたけど、おかしいんです。確かにこの番号で登録はされているんですが、モノは

並列演算機器を束ねるホストコンピュータの熱暴走を防ぐための大規模冷却装置だって。同感気手もキャリアケースに収まりきりませんよね」

いつものノロマな初春と変わって、こういう時には仕事の出来る初春。さすがと言えはいいのか、普段から頑張れと言いたいですわ。

「何ですって……？そもそも『学舎の園』では金属部品ならまだしも、機材その者の搬入は聞いたことありませんわよ」

これは『学舎の園』の独自技術を外部へ漏らさないための対策であり、外に機材を発注するなんてありえない。

なんだかキナ臭くなってきましたの。

「荷札自体の映像解析を行っていますが、これだけでは本物かどうかは確証は持てないんです。やっぱりデタラメな荷札をコピーして、適当に貼り付けているだけなんでしょうか」

「……、待ちなさい。カメラの映像とか、目撃者とか。それ以前に、そもそもキャリアを盗まれた当人から直接事件について話を聞いた方が早いんじゃないやありませんの」

さっぱり分からないのなら、分かる人から聞く。それは当り前のことだ。

だが、「当人はいないんです」と初春からあっさりした答えが返ってきた。

当人がいないとはどういうことですか？少々驚きながらも初春に

続きを促す。

「私たちとは別に、被害者の方も追跡し始めたみたいです。直後の映像、見ます？強盗は十人以上いたのに、たった一人で誰かに連絡を取りながら追いかけて行ってますよ」

初春がコンピュータを操作すると、ウィンドウだらけの画面にさらに一つ、新たなウィンドウが開く。

それは事件当時のおそらく監視カメラが捉えたであろうビデオ映像だった。駅前の大通りらしき場所で、高級そうなスーツを着た一人の男が周囲を見回した後に、慌てて携帯電話では無く無線機を使ってどこかと連絡を取っている。

初春は「ここです」と動画を一時停止させた。止まった画面をよく見るが、特におかしいところはない。

「白井さん。被害者のスーツがちょっとめくれて、何か見えませんか？」

言われてみれば確かに男のスーツが少しめくれており、脇腹の辺りに黒っぽいサスペンダーのようなものが見えた。

「拡大すると、型番が見えるんですよ。L-Y010021。大手重機メーカー公式のシオルダーホルスターです。服の中に拳銃を収めておくためのヤツですよ」

初春は刑事ドラマとかでスーツに拳銃を懐から取り出したりするアレと例を交えて説明してくれた。熱心に説明してくれるのは良いが、本物かどうか怪しいものである。

「ただの飾りかもしれませんわよ？」

「ええ、ただの飾りかもしれませんね。こっちも」

続いて初春はスーツの男の胸の辺りを拡大する。そこから初春が何かの操作を続けると、何百本もの細かい矢印が出現した。

どうやらその矢印は服の細かい凹凸を検出しているらしく、おぼろげに拳銃らしいシルエットを形作っていた。

「一応、映像はこれだけです。……もつと他に映ってても良さそうなものなんですけどね。白井さんどう思います？」

この男が他のカメラを避けるように移動しているのか、たんにカメラを避けて逃げる強盗を追いかけた結果、男の姿も捉えられなくなっただけか……。

「もう一度、映像を最初から見せていただけますか。何か初春の見落としもあるかもしれませんし」

「むう、見落としなんてありませんよ」

「早くしなければ、その無駄に咲き誇っている花飾りをどこかにレポートしますわよ」

「ああ、あ！？ごめんなさい。今すぐしますっ！」

それから何か手掛かりが何か残ってないか、何度か映像を見直した。

「それで見つかったのが、高峰さんだけとはどういうこと言うことですか」

ひったくり犯である少年達が走り去った後、ちらつと画面の端っこの方に犯人を追いかけるように高峰さんが走っている様子が確認出来た。

「それにしてもこちらの女の子は誰なんでしょうかね？」

犯人達を追いかける高峰さんを見つけた後、彼の行動を確認するために映像を逆再生していたら、中学生っぽい女の子と一緒に行動していた。

映像を再確認する限り、犯人達をその女の子が追いかけて、その女の子をさらに高峰さんが追いかけていたと言う状況らしい。

「知りませんわよ、そんなこと。それよりも事件に詳しくそうな高峰さんにこの時の状況を聞いてみますの」

お姉様に見た目SFっぽいだけで機能性のないハッター携帯と揶揄された携帯を取り出し、高峰さんに電話をする。

わたくしの携帯は直径一センチ、全長五センチほどの口紅のような円筒の形をしている。小さすぎて、なくしやすい、ボタンが押しづらい、モニタが見にくいの三拍子揃った携帯だが、側面のスリットから紙のように薄い透明な『本体』が滑り出てくる。

そのバカげた未来未来と言った感じが良いのに、お姉様の理解が得られなくて少し悲しい。

「電源をお切りになっているようですわね」

この前お聞きしたばかりの電話番号で、これが初めて電話でしたのに高峰さんは淑女からのお誘いを拒否するとはどういうことなの。

若干イライラしたが、これでようやくやるべきことが決まった。

「初春。アナタは高峰さんと彼と一緒にいた女の子を過去の監視カメラの映像で追いかけてみてください。わたくしはとりあえず現地に赴いてみますから、何か分かりしだい連絡くださいですの」

「了解です白井さん。この女の子の個人情報を調べ上げておきます」
ビシッと初春はわたくしに敬礼する。あまりにもアホ行動だったので頭を軽くはたく。

「わかってますよ。ちゃんとやりますって」

少々初春の言葉は信用できませんでしたが、今は現場に行くことが最優先ですわね。

．．．to be continued?

お仕置き回避のためなら何をしても許されるんです（後書き）

ほとんど原作通りで、いつもなら絶対に書かないであろう後半の黒子視点。

だけど、最後のやり取りが書きたくて書きちゃった（笑）

て、この後書き書いてる瞬間に結構強めの地震来た……。そのせいで三分ほど投稿遅れたぜえ

命を賭けたゲームって闇のゲーム以外にもあるんだね

第七話【九月十四日？】

ひょんなことから始まった『チキチキ、むぎのんのお仕置きを受けるのはどっち！？愛と勇気でキャリアケースを取り戻せっ！』ではあるが、ハッキリ言ってメチャクチャ俺の方が不利な事に隠れ家から飛び出してから気付いた。

絹旗は独自の索敵手段を持つてるけど、俺って裏の世界入ったばっかりだからそんな伝手無くね？

……。

うん、これはアレしかないな。

「ちよつと待て、絹旗ああああっ！！」

もちろん、ターゲットを捜す手段を持っている絹旗の金魚のフンになるしかないっしょ。

うんうん。だって他に方法無いもん。これ以外の方法……例えば自力で探したとしたら絶対に俺が麦野のお仕置きにあっちゃうもん。

あまりにも理不尽さを感じたので恥も外聞も無く絹旗におんぶに抱っこの状態になることを決めた俺であった。

「ああ、超ウザいです。高峰はどっか行ってくださいよ」

「良いじゃん良いじゃん。邪魔にならないようにずっと背後に居るからさ。それに俺がいると便利だぞ。なんと、未だ暑さの残る残暑厳しいこんな日でも俺が能力で快適な気温にしちゃうよ？お得だよ？？買い時だよ？」

とにかく自分を売り込むしかない。それをしなければ俺がお仕置きの対象になってしまうからな。

てか、敵に頼るのはどうかと思うが、今はそれしかないんだッ！

「ちっ」

あまりに俺がウザすぎたのか、絹旗の野郎が舌打ちしやがったよ。だが俺はその威圧に屈するわけにはいかない。

だって、麦野に何されるかわからないんだよ！？　ここは先輩ということで絹旗がお仕置きを受けてくれればいいのにさ。

その後もウザったらしく懇願していると、絹旗は「はあ……しょうがないですね」と諦めてくれた。

ありがとう絹旗。流石は一部マニアがメロメロになってしまったりロリ体型という魔性のボディを持つ絹旗だよ。もちろん俺も固法さんという例外を除けばマニアだぜっ！

「それじゃあ、ターゲットを見つけしだい勝負開始って事で超良いですか？」

「うんうん、もちろんだよ。こちらとしては絹旗に感謝感謝感謝し

てもしきれないぐらい最高の条件だよ」

手を合わせて感謝を表す俺を絹旗はじと目で見ながら、

「高峰……超キモくなりました」

「おうおうおう、そんなつれない態度をとらないでくれよベイビィ
ちゃ——ぐべらッ」

殴られました。それはもう一言で殴られたと申告できるレベルで
殴られました。絹旗の細腕からは考えられないような威力で、自分
の顔面が陥没してないか心配になってしまふ。

ただまあ、能力を使わなかったのは唯一の絹旗の良心だった
のかもしれない。

「遊んでないで、早くついて来ないと置いてきますよ」

絹旗は俺が地面と素敵な抱擁を交わしている間にターゲットの位
置を特定したらしい。出来る先輩を持つと後輩として鼻が高いです
よ。

「イテテ、ちょっと待ってくれよお」

痛む頬をさすりながらのろろと立ち上がりどんどん先に行つて
しまふ絹旗の後に続いた。

ターゲットまでの道中、絹旗はキャリアケースを奪った犯人につ
いての情報を俺に話していく。勝負の相手である俺に教えてくれる
とはなんて絹旗は優しいのだろうか。思わず惚れそうになったが、

口の中で「インデックスインデックスインデックス……」と呟き続けてなんとか自分を正気に戻した。

「私たちからキャリアケースを奪りやがったクソ野郎の名は結標淡^{むすじめあ}希^{わき}と言っらしいです」

結標……？俺の脳内には引っかからない名前だな。ということは原作とは関係ない人物だろうか。

頭にハテナマークを浮かべる俺を無視するように絹旗は続ける。

「霧ヶ丘女学院二年。いわゆる超エリートってやつですね。因みに私も高峰と違って超エリート中学に通ってるので超尊敬と良いですよ」

「あー、はいはい。どうせ俺の通ってる中学は無名で特徴のない無個性な学校ですよ」

「つか、絹旗って中学生だったんだな。だったか完璧に俺の方が歳上だよな。でもまあ、『アイテム』では後輩なので先輩風を吹かせた瞬間に殺されそうだ。」

「で、その結標とやらの特徴は？」

このまま不貞腐れてても仕方が無いので絹旗の機嫌が良いうちに情報を引き出す。麦野のお仕置きなんて絶対に嫌だしな。それに俺はその結標とやらの目で確認できていないことも大きい。

「ああ、特徴ですね。えーと、今日のヤツの格好は……」

そう言いながら絹旗は携帯を弄り、目的のページが表示されたのか俺に見せてくる。

年頃の少女であるはずなのにデコレーションやストラップが全くない携帯だ。まあ、この携帯は仕事用で、プライベート用の絹旗の携帯は色々な意味でヤバいんだけどな……って話が逸れた。

見せられた携帯の画面には俺たちをこんな面倒な状況へと誘いがった犯人の画像が表示されていた。

胸を隠す様に桃色の布を身体に巻きつけその上からブレザーを羽織り、下半身はミニスカートだけという健康な少年に対しては目の毒にかなりえない露出度の高長い赤髪を二つに分けた少女だ。

「さすが高峰。こんな状況と言えどもエロを忘れないとは厨二病の鏡ですね」

「いやいや、ちょっと待って下さいよ絹旗先輩さん。仮に俺がこの画像を見て興奮していたとしましょう……だけど、この画像を見せたきたのは絹旗先輩さんと言う絶対的事実の前にはそんな些細な事は無視されてしかるべきなのではと俺は思うわけなんですよ」

「超ウザいです、高峰」

必死の言い訳というかなんて言ったらいいのか分かんないけど弁明みたいなものをしてみるも絹旗の一言で一蹴される。ああ、俺も職業『HIKI KOMORI』って自称したくなってきたよ。

一つ溜め息を吐く。

「まあ良いです。コイツの能力ですが――」

はあ……最悪だ。絹旗の言葉を聞かなくても結標とやらの能力は知っている。というか、ついさっき思い出した。

風音エ……。

おっと、このネタは止めておこう。これ以上広げるとノクターン行きが確定してしまう、ってメタ発言はほどほどにして思い出しちゃったんだよ。

原作読んでる時に実はやり方しだいでコイツが最強なんじゃないかね？って秘かに思ってたキャラだよ。誰だよさっき原作とは関係ない人物だって簡単に決め付けた馬鹿野郎は、って俺か。

たしか結標の能力は『ムブポイント座標移動』。

空間移動能力の頂点に位置する能力で、通常の空間移動能力者とは違って物体に直接触れなくても物質を転移させる能力だったはず。一応、能力としての印象が大きかったので憶えていたが、ホント俺は人の名前は主人公格かヒロインぐらいしか憶えて無いと悲しいな。

さすがに細かい能力の詳細までは憶えて無いが、それでも触れていない物質を転移させられると言うのは最強すぎるだろ。

例えばの話、アクセラレータ一方通行には効かないだろうが、敵対している相手の心臓を転移させればそれだけでいとも簡単に人間は死ぬ。

ただまあ、原作にはそんな描写が無かったので出来るかどうかは

不明だが。それでもそこら辺に落ちている手頃な小石を心臓目掛けて転移させることは出来るだろう。

ハハッ、ホントにブルツチャうよな。それだけの能力を持つ結標を相手にしないといけないなんて恐怖の感情しか湧いてこないが、だけどやらないとみんなの身に危険が迫ることになりそうだ。

ただ幸いなことに、今日の前で絹旗が頭の残念な子供に教えるように講釈してるのだが、結標は過去のトラウマで自身の転移が出来ない。そのトラウマがあるからこんなすごい能力なのにレベル4止まり。それがせめてもの希望か。

それにしても……この事件ってたしか原作でもやってたよな。

あれれ？これって何巻の出来事なんだ？全く思い出せない件について。

たしか数日前の俺の予想では原作七巻から九巻の間だったはず。それを鵜呑みにすればきつと七巻だろう。かと言って、禁書目録は時間軸の進み方がかなり遅かったから実はもう十巻以降のストーリーに入ってたとか言う可能性もある。

うぎゃー。わけわからん！

首をブンブン振り回して出口の無い迷宮に入りこもうとしていた思考を呼び戻す。

「ついに頭の方が壊れてしまいましたか。ざまあないですね」

もう泣いて良い？絹旗と行動するのが嫌になってきた。

そんな感じでテンションが上がらないまま俺は結標の居場所を掴んでいる絹旗の後について行く。トボトボと女の子の後を追隨するしよんぼりした少年……非常にシニールである。

この状況を打開しようとして、

「なあなあ、ロリっ子先輩……いえ、間違えました。絹旗先輩ですよ。あはは、俺ったらどうしちゃったのかな？もしかしてあまりの暑さで頭がイカれちゃったのかもしれないよ。あつはつは。え？能力使ってたから暑さで頭はイカれるはずは無いって？はい、ごめんなさいすいません。軽い冗談だったつもりなんですよ。だから許してちょんまげってね……ごめんなさい」

色々と自爆した。

今後は絹旗をロリっ子先輩と呼ぶのは止めよう。さっきから気になってたことを聞くはずだったのになんて俺はバカな事をしてしまったんだ……。

とまあ、ふざけるのもここら辺までにして真面目になろう。

「さっきから思ってたんだが、信号機の故障多くないか？」

おそらく何らかのトラブルか配電ミスなのだろうが、それにしてもあちこちで信号機トラブルが起きていて人為的なものを感じる。

しかも俺等が進むにつれて信号機トラブルが多くなっていつている気がした。

「どうやら私たちとは別にキャリアケースを超狙ってる人がいるみたいですね。発見次第、高峰が超始末しておいてください」

「なんで俺が……」

そもそもキャリアケースの奪還がお仕置き回避の絶対条件なのに、なんで俺が第三勢力の排除しなくちゃいけないんだよ。

不公平すぎる。まさかこれがパワハラと言われるモノなのか……？ ストライキ起こしてやんぞコノヤロー。まあ、ストライキなんて起こしたらお仕置きが確定してしまうので絶対にしないが。

「何を勘違いしてるのか分かりませんが、単なるその場の状況に合わせた判断ですけどね。高峰の能力なら人ごみでも敵の超無力化ができるので色々と便利なんですよ」

いや、そうなんだけどさ……。

俺の能力なら敵さえ発見してしまえば、気付かれないように近づき対象物の体温を下げる。それだけで強制的に休眠状態に出来るの。あとは救急車に任せればOKという簡単なお仕事なのだ。

これなら必要以上に街中でケンカ騒ぎを起こさせずに非常にスマートに敵を排除できる。

……って、何歳下に丸め込まれてるんだよ。いやまあ、確かに仕事優先のその考え方は賛同に値するけど、それじゃあ、俺がお仕置きを受ける確率が高くなるじゃんよ。それが気に入らん。

「だけど——」

「だけでもヘチマも無いです」

俺が反論しようとしたらすぐさまカットイン。さすが絹旗先輩ツス。

「確かに麦野のお仕置きは超恐いですよ。だけれども、仮に第三勢力を超野放しにしてキャリアケースを奪還できなかったとしましょう。あら不思議。麦野の額に二本の角が……。あとはもう超理解できますよね？」

想像してみる。キャリアケースの奪還に失敗して『アイテム』の隠れ家に帰る。麦野の額に二本の角が。俺達二人ともアポーン。

な、なんて細かい未来予想図なのだろうか。瞼を閉じて想像するだけでもそこまでの道筋がすぐさま浮かんだ。さすがにお仕置きは未経験なのでそれ以降は思い浮かばなかったけど。

確実に二人でお仕置き受けるか、多少俺のお仕置きを受ける確率が高くなってもお仕置き回避のために頑張るか。

どちらを取るかなんて決まってるじゃないか。

「ウン。オレ、ガンバルヨ」

「よし、それでこそ超高峰です。最悪の未来だけは何としても回避しなければなりませんよ。……例え一人の無垢な少年の命を超犠牲にしたとしても」

「え？最後何言った？」

「何でも無いですよ」

あれー？俺の聞き違いだったのかな……？

俺にとってメチャクチャ危険な言葉が最後の方に聞こえたような気がしたんだけど、まあ、その辺りは聞かなかったことにした方が俺の精神衛生上良い気がする。うん、きつとそうだ。

「で、あそこに見えるのがターゲットのキャリアケースで間違いないよな？」

「間違いないようですね」

視線の先には大事そうにキャリアケースを転がす複数の少年たち。ちょうど地下街から出てきたところのようで、そのまま人工衛星の監視を避けるように次の地下街の入口に向かってるようだ。

ただ、

「なんで、結標がないんだ？」

「さあ？私に聞かれても超迷惑です。厄介な能力者がいないってことで超ラッキーですかね」

確かに超ラッキーではあるな。だけど、奇襲されることも念頭に置いて行動した方が良さそうだ。

「じゃあ、楽しい楽しいゲームの超始まりですかね」

さて、最終的にどっちが麦野のお仕置きを受けることになるのかね。

．．．to be continued？

命を賭けたゲームって闇のゲーム以外にもあるんだね（後書き）

みなさんお久しぶりです。

活動報告を見てくださってる方なら知ってるかと思いますが、ただいまスランプです。

いや、ちょっとスランプとは違いますが、概ねスランプと言っても差し支えないでしょう。

今話は投稿してないのに増えていくお気に入り登録に励まされ……いえ、投稿しなければという責任感で書きました。

なのでちよつと文章が荒いって言うか、内容も残念な仕上がりになってたと思います。

まあ、修正する気なんてありませんけど。

要するに今後の投稿が遅れる可能性が高いです。

楽しみにしてくださっている方がいたら申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5012r/>

新約 とある魔術を希望の温度変化

2011年4月16日16時27分発行